

民國十四年十二月一日發行
第一八〇號 每月一號 日發行

子鹿不

12月号

鈴鹿 呂仁

拾掬集 その八十七



木の実落つ一つ二つと胸に落つ
寄る波に心を返して秋惜しむ
椋鳥の空の揺らぎや武道館
椋鳴いて街の灯りのまた一つ
信濃路の空を抱きては秋惜しむ
硯海に命毛の炎ゆ寒の月

新米や自称左党の納豆好き
一策は無策に勝てず冬の蝶

双眸に炎の叫び青鷹

泣きぐせのまま冬蝶の細き翳

鍵穴にあえかな震へ霜の夜

大阪俳人クラブ吟行・奈良界限

飛火野に翳る面差し鹿のこゑ
相輪の空を弛ます鳶の秋

俳句四季十二月号

クリスマスローズ横浜異人館

近詠

和田 照海



竈馬

篁に海峡の風鷹渡る
母の忌や真闇にはねて竈馬
海峡にかかり一笛島の秋
きちきちの機嫌とびして湖真青
痩せ葉飲む順番や小鳥来る

近詠

松本 鷹根



水澄めり

山近く紅葉の彩に合わせ棲む
蕊と言ふ心重ねに茶花咲く
紅葉の橋桁高く水滾つ
柿晴れて碑石不動の影のぼす
境涯を水に響へて水澄めり

—近詠—

塩貝 朱千



月今宵

叢雲と遊び疲れし小望月
月光を十指にまとひ鶴を折る
折鶴の二羽を翔たせむ月今宵
秋さうびの閑けさが好き白が好き
ヒツチコツクの空あり燕の時入り

英華採集

笛の音を訪めゆきて佇つ十三夜 京都 大西逸子
箏の名手であり美貌の女性として伝えられる小督と笛の名手であった源仲国との有名な逸話を下敷きして鑑賞すると掲句の面白さが深まってゆく。先の名月を楽んだ二人は、次の後の月と一緒に見る約束が出来ており訪ねる場所を今度は相手の家を訪ねることになる。恐らく場所を知らしめるために吹いている笛の音は、甘美で妖しく誘い込むような調べであろう。今宵の月に包まれる二人の楽しい影が生まれるに違いない。

秋の蚊や刺されて気付く泣き所 福山 守屋桜子
人によっては秋の蚊を殺生することは憚るとして、そのままにしておくか、聞かされたところがある人も多くの人が秋の蚊を打ってしまうのではないかと。掲句は、恐らく知らぬ間に刺されたのであるが、刺された場所が思いも寄らぬ処であったのが面白い。弁慶の泣き所とよく言われるが、その泣き所も人それぞれに持っているもの、大半が知らずに過ごしている。どんな場所に自分の泣き所があるのか知りたいもので俳味のある一句になっている。

落し文返事待ちをりきのふけふ 亀岡 高橋澄恵
歳時記を開くとゾウムシ科のオトシブミという小さな甲虫の雌は、檜などの若葉を巻いて幼虫の棲み処を作るとあり、これが非常に粘着力があり容易にほどけないものでこの若葉が裁ち切れて地に落とされることになる。これを昔の人は「落し文」と名付け小鳥の仕業と見立したのは俳諧味に通じる。掲句は、親しい人からの返事が届かない寂しさを季語を通して切実に吐露しているのではないか。下五に時間の長さがでてくる。

枯 芒 沼田巴字

菰卷をして名園の一日暮れ
水仙のなだれる崖や海は碧
初鴨の嘴軽しリズムカ
極月やなぜ生きるかを問はれをり
枯芒余生はいよよ幻に

天高し 植村蘇星

日の本の言の葉凜々し秋の暮
誉め上手慰め上手秋の暮
天高し怒りや吾が損人の徳
懇に言葉の綾や秋の暮
忍びよる老化現象秋の暮

冬星座 北川孝子

影もまた己の支へ冬星座
木守柿平穩無事といふ不安
舌の根も木の根もすこやか冬満月
ときめきのまだ少しあり冬うらら
猫がまた猫追ひ薄葉しぐれかな

遠花火 直江裕子

鉢巻とカンナが消えたあつい夏
かなかなや指先まで黄昏れて
あの日からどこかが冷めて遠花火
一瞬をはらんで眠る椋大樹
鶏頭の数をめぐりて俳談義

行所なし 高木晶子

玄関へ飛んでかまきり行所なし
秋の雨その他大勢養へる
今日一人足を止めし狗尾草
職人の業でちぎれて秋の雲
姉妹の蕾も落ちて秋海棠

湖渡る 伊藤希眸

みんなの松のうらがは白衣かな
一途とは疎ましきことも萩の月
白桔梗謀反の心などはなく
秋すすむ無伴奏(アカペラ)の声湖渡る
吹かれきつたるいぬころ草の穂のひかり

家族ゲーム 奥田筆子

直鋭鈍三魚一同居彼岸の家
肩張りていびつな個性ラ・フランス
返球が痛い家族ゲームの野球盤
草むしり言語離れてゐる軽さ
あめんぼに夢想の旅の広さあり

ポインセチア 井上菜摘子

ポインセチア指輪して指さびしが
ポインセチア隙間時間をはみだして
凧に曝されてゐる手術痕
歌ふにもうしろが好きでクリスマス
年の夜の水をゆっくり噛んでゐる

神麓集

夜の秋 村田あを衣

尼寺の悲話を濡らしぬ螢草
信心を問ふや揺るるは蓮の露
みほとけの視野へ秋蝶翳らざる
嵯峨野路の風ふところに秋の蝶
琴の音は追慕の風に夜の秋

赤とんぼ 山中志津子

海に向くマリア纏ふは黄のカンナ
かまきりのポーカーフエース裏戸守る
露草は智恵子の空の欠片とも
鬼あそぶ霧の飛鳥の巨石群
赤とんぼそちらの空は行き止まり

クリスマスソング 井尻妙子

後ろ手にほどけぬ仔細枯野原
霧の中すれ違ふ私とわたくし
縦のもの横に倒して十二月
福助の福耳クリスマスソング
数へ日や黄の錠剤の日に三粒

ディスプレイ 鷺山珀眉

桐一葉もののあはれに通じをり
無花果の空に微熱と言ふ甘さ
一馬身及ばずゴール秋高し
ディスプレイ一気にかはる秋はじめ
ひぐらしのひぐれアリバイあからさま

夏の蝶 亀井福恵

とみかうみして振花の素心かな
木洩れ日の一片と化す夏の蝶
立葵はるかな天の奥に夫
青田原風に機運を待つばかり
青すすき波打つ風の一張羅

素秋 菊池和子

落し文きりきり舞ひの自己主張
葉に残す一途な命秋の蝶
秋風鈴吐息のやうな感嘆符
山暮れてかなかなのこ糸沈みゆく
橋わたる風はむらさき嵯峨素秋

星流る 西村白杼

稲妻や自我をいづこに捨てやうか
かくれんぼだーれもみないうつし草
星流る祈りし吾も過客なり
三歳に三分の理ありえのこぐさ
月の道十歩が百歩の散策に

笙の笛 安田優歌

回想のページの薄れ夕花野
笙の笛ひと節ごとに月のぼる
病室の孤独の窓や月今宵
退院す有為の奥山越えて朱夏
終章は淡きむらさき大花野

野分雲 本郷公子

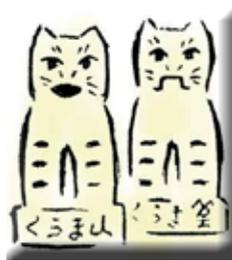
蓮の実とぶ終着駅はまだ見えぬ
朽ちかけし湖北の墓標野分雲
秘めやかな野宮人や藤袴
大海のヨットは独りぼつちかな
白雨去り竹のそよぎの夕ごころ

稲架仕舞 石原孝人

黄落のひとひらごとにある矜恃
石積の島の段畑秋夕焼
稲架仕舞ふ峡の棚田の薄けむり
島沖の潮目の乱れ秋の雲
余生てふ豊かな余白日記買ふ

雨上り 佐藤千恵

ルンバ行く夏のかけらを零しつつ
鈴虫や土間に大きな介護靴
パスワード一字まちがえ葛嵐
うやむやに終る正論黒葡萄
透きとほる声や九月の雨上り



京鹿子集

鈴鹿呂仁 選

水琴集

青春は忘れぬ花火日記閉づ
疫禍やまぬ花鳥瓜上りつむ

横浜 兵 泉美

遊具ぼつり日晒しの野に蝉しぐれ

「へくそかづら」いつしか耳朶に取りつきぬ

靴底の折れし半券夏の果

さびしくては光る夜の熱帯魚

ビヤホール本音たてまへ入り乱れ

聞き役のときどき動く秋扇

夜の部屋どかと居座る残暑かな

暑し暑し晩年の計なり難し

蟻地獄過去はふるひにかげられず

書棚より漱石の「門」秋立ちぬ

釣糸に藻屑のからむ残暑かな

はからずも安否問はれし野分雲

名水のにほひふくらむ新豆腐

福山 北村 梢

武藤 弘海

鳳仙花たは戯言飛び火する迅さ

門井 千歩

山の端にかかる夕日や曼珠沙華

山崎 妙子

ロシアまで空一枚や大根蒔く
赤茄子白き小皿に秋二つ

新涼や一氣に走る裁ち鋏
萩こぼる遣らずの雨の夕間暮れ

爪を切る敬老の日の朝刊に

秋航の遊覧船や峡清し

守宮鳴く哀しきまでの腹を見せ

秋灯や恋の行方は下巻へと

花火果て闇にうつけの顔ばかり

政時 英華

夕風に夭折の報白芙蓉

福森 順子

ダリア咲き女はルージュ赤赤と

流灯や武骨な父の流れ下手

そのことは水に流して髪洗ふ

祇王寺に孤悲を辿れば夕かかなかな
安心あんじんの地への相聞桐一葉

ストローを噛む癖今も夏果つる

花嫁の投げたるブルーケ雲の峰

浜木綿の裂けて綴れて白き恋

岡山 岸本 順子

浜屋顔蹀あたりこそばゆき

秋茄子の指に馴染むや濃紫

小鳥くるブルーベリーの風つれて

夕かなかな百年松に風わたる

朝顔の蔓に絡むは朝の光ゲ

京都 塩見かず子

目つむれば風の彩り大花野

笛の音を訪めゆきて佇つ十三夜

歪なるレタスイちまい晩夏光

水占ひ貴船の宮の水澄めり
耳底にのこる潮騒貝風鈴

多摩川のグラント広し秋茜

新涼や朝湯あふるる松風呂

夕化粧いる取り取りの通勤路

溪に沿ふ石仏の黙晩夏光

京都 大西 逸子